

(資料2)

真宗大谷派名古屋別院東門及び土塀（しんしゅうおおたにはなごやべついでんひがしもんおよびどべい）

員数：1基

所在地：名古屋市中区橋

所有者：真宗大谷派名古屋別院

【概要】

「真宗大谷派名古屋別院東門及び土塀」

構造、形式及び大きさ：東門 木造、瓦葺、間口 4.2m、左右袖塀及び北方潜戸付
土塀 瓦葺、総延長 5.9m

建設年代：江戸後期／平成 28 年（2016）改修

（登録基準：国土の歴史的景観に寄与しているもの）

真宗大谷派名古屋別院は名古屋市中心部に位置する。

当院の歴史は史料によると、元禄 3 年(1690)に尾張藩二代藩主徳川光友が、城下に真宗大谷派御坊(掛所)の建立を許可したことから始まる。翌 4 年には古渡城址^{ふるわたりじょうし} 1 百間四方の土地が光友から寄進され、以後 12 年の歳月をかけて伽藍が造営された。時の東本願寺十六代門主一如上人によって開創された。

その後、文化 2 年(1805)から文政 6 年(1823)にかけて、伽藍^{がらん}の拡張再建工事が行われたが、戦時中の昭和 20 年（1945）3 月の空襲で境内のほとんどの建物が焼失した。

東門の建立年代を記した史料はないが、細部意匠から判断すると、上記の拡張再建工事に合わせ、江戸時代後期に建立されたものと思われる。境内のほとんどの建物が戦災焼失した中で、わずかに罹災を免れた当別院最古の建物である。

東門は、木造切妻造本瓦葺の一間一戸高麗門^{こうらいもん} 2 で、東面して建つ。門の南北両脇には、木造の棧瓦葺の袖塀が延び、袖塀と直角に木造切妻造、棧瓦葺の土塀が接続する。

南北袖塀の北袖塀には潜戸が付いている。南北土塀は石垣の上ののり、外観は土塀に見えるが、構造は木造、内部は空洞で切妻造棧瓦葺の屋根をのせる。

平成 27 年（2015）7 月から平成 28 年 7 月にかけて、修復工事が行われたが、建立時の意匠をよく残しており、江戸時代

後期の真宗伽藍における門の典型的一形式を伝えている。

^{ふるわたりじょうし}古渡城址¹：織田信長の父信秀の居城であった古渡城の旧跡。真宗大谷派名古屋別院の境内にある。

^{こうらいもん}高麗門²：本柱 2 本と控柱 2 本とからなる門。本柱上に切妻屋根、控柱上にも別に屋根がかかる。



真宗大谷派名古屋別院東門及び土塀 正(東)面
(名古屋市教育委員会 提供)